

第54回 卒業式(校長式辞)【抜粋】

- ただいま、卒業生311人に、卒業証書をお渡ししました。卒業おめでとうございます。
- さて、卒業生の皆さん、皆さんの高校生活は、コロナとともにあった3年間でした。入学しながらも登校できない日々、その後も、分散登校、時差登校、オンライン授業などを繰り返すことになりました。その中、皆さんは、いつも前向きな姿勢を持ち続け、教科の学習はもとより、学校行事にあたっては、創意・工夫を重ね、3年間すべての行事を開催することもできました。本当に良く頑張りました。校長として皆さんのことを誇りに思います。今、皆さんの晴れやかな顔を見て、これまでの卒業式とはまた違った、喜びを感じています。
- 皆さんの入学式は、新入生のみ参列でした。式では、「邂逅」という言葉をお示しました。あれから3年間、皆さんは柏陽で、多くの、人・モノ・コトとの邂逅があったことと思います。それら出会いのすべてが、今の皆さんの思い出、将来の財産となるものと思います。
- 今日は卒業生に、二つのお願いがあります。
- 初めに、震災の話です。私は、東日本大震災の起きた年から県立高校の校長を務めております。あの地震は、今までの価値観を大きく左右するような衝撃的な出来事でした。あの時、皆さんはお幾つだったでしょうか。以来、毎年夏には東北の様々な地を訪ね、その年の卒業式で災害の傷跡や復興の様子、被災地の今の話をしていました。若い世代に伝えていくことが、自分の使命と想ってのことです。コロナ禍以後は、控えており、今日は具体のお話はできません。しかし、12年前にこの横浜でも大きな影響のあったほどの地震があったこと、その記憶を風化させないよう、皆さんにお願いしたいと思いません。
- 次は私の昔話です。中学校の卒業文集に、大変お世話になった、Sという先生が載せた言葉についてです。実は、その言葉に対し、ずっとある引っかかりを持って受け止めてきました。
- 読んでみます。
- 小さき者よ。
不幸な、そして同時に幸福なお前たちの
父と母との祝福を胸にしめて、人の世の旅に登れ。
前途は遠い。そして暗い。
しかし、恐れてはならぬ。
恐れない者の前に道は開ける。
行け。勇んで。小さき者よ。
- これは、有島武郎の小説『小さき者へ』の最後の部分でした。引っ掛かりとは、この中の「前途は遠い。そして暗い」という部分です。卒業生への「はなむけの言葉」として、どうなのかな、という思いでした。
- 時は流れ、S先生がお亡くなりになったことを聞きました。その時、この言葉を思い出し、気付いたのです。どうやら、人生というのは、無邪気に輝かしいものでない。特に、志を立てたとき、その志が高ければ高いほど、「前途は遠く、暗い」のが現実なのでしょう。だからこそ、「しかし、恐れてはならぬ。恐れない者の前に道は開ける。」となるのです。随分、時間が経ちましたが、S先生の思いがやっと分かった、そんな気持ちになりました。
- 卒業生の皆さん、明日からより広いフィールドの中、沢山の邂逅が皆さんを待っています。その中には様々な困難もあるかと思えます。その時です。皆さんは、柏陽で学んだことを基盤として、勇気を持って、困難に立ち向うこと、さらに、予測困難と言われる、これからの世界・社会の中にあって、その時代を創り、リードしていくこと、それが、柏陽を卒業していく皆さんの使命だと思えます。
- 皆さんの、これからの人生に、幸多かれ、と心から祈っています。

【結び】

○結びに、もう一度申し上げます。

前途は遠い。そして暗い。

しかし、恐れてはならぬ。

恐れない者の前に道は開ける。

行け。勇んで。小さき者よ。

以 上